

## 青年期から成人期にかけての母親認知の縦断的变化

### — 母親になること —

井森 澄江\*, 山岸 明子\*\*

(平成 20 年 9 月 30 日受理)

## Longitudinal Change in Cognition of One's Mother from Adolescence to Adulthood from the Viewpoint of Becoming a Mother

IMORI, Sumie and YAMAGISHI, Akiko

(Received on September 30, 2008)

キーワード：母親認知, 縦断的研究, 青年期, 成人期

Key words: cognition of mother, longitudinal study, adolescence, adulthood

### 本研究の問題・目的

近年の平均寿命の大幅な延長にともない、発達心理学においても青年期までに過ぎず成人期以降の発達研究が盛んになされるようになり、また女性の生き方の多様化に伴ってさまざまな生き方をしている女性の発達に関心もたれるようになっている(岡本,1999, 柏木,2003)。また、母親認知や母親との関係に関しても、幼児期・児童期・青年期といった未成年の時期だけでなく、成人期女性に関する研究が増えてきている(結婚や出産による母親との関係の変化を検討したFischer,1981など)。特に、母と成人した娘の親密な関係や世代間のサポートに関して多くの研究が行われている(春日井,1997; 島谷,1999; 北村・無藤,2001; 北村・無藤,2002)。北村・無藤(2001)では、母親との関係が成人した娘の適応状態を規定する度合いを検証するとともに、結婚や出産によって母親との関係がどのように変化していくのかを検討した。北村・無藤(2002)は成人の娘とその母親との間でのサポートを検討し、20代後半～30代前半では親から子への方向のサポートが主であることを示した。また、愛着の世代間伝達に関しても研究が行われている。van IJzendoorn, M. H. (1995)はAAI(Adult attachment interview)の予測的妥当性のメタ分析として、母親になった者の自分の母親についての認知と子どもとの関連を「愛着の世代間伝達」の問題として検討する研究を行った。日本でも数井他(2000)が母子における愛着の世代間伝達について検討している。さらに、若い成人にとどまらず、生涯発達の全世代で母親との関係がどのように変化するかを検討する研究(渡邊,1997, 井森他,

2006など)もなされている。井森他(2006)では大学(短大を含む)を卒業した20代から80代の女性の「親と自分との関係」の分析において、親依存傾向は20代では高いがその後年代が上がるにつれて低くなっていること、また、親との安定したパートナーシップ形成は20代から30代にかけて増加することなどを見出している。

ただし、井森他(2006)を含め、それらの研究の多くは横断的なものであり、個々の変化を縦断的に検討する視点をもつ研究は少ない。一方、幼少期から成人期に至るまでの大規模な縦断的研究の成果が公刊されるようになっている(例えば成人愛着:Grossmam, K.E., et al. 2006, パーソナリティ特性, 知的機能: Sroufe, L.A. et al. 2005)が、母親認知を縦断的に検討するものはほとんど見られない。

本研究では青年期の母親認知が成人期になるとどのようなのかに関して、同一の被験者から得た縦断的データによって検討を行った。取り上げた時期は、看護短大在籍時と、卒業後10年経った時期である。卒業後10年たつと、職場においては看護職の仕事にかなり熟達し、責任も重くなりつつあるし、また看護職に就いた後に結婚し、出産して母親役割を担って子どものケアをしている者も多くなっている。彼女たちは、成人期の発達課題である他者の世話をする「ケア課題」を担うようになっており、娘という立場、ケアを受ける立場から、ケアを与える側へと社会的地位を大きく変化させている。一連の研究である山岸・井森(2008)ではそのように生きる立場が変わることが母親認知にどのような影響を与えるのか、青年期の母親認知と30代はじめの女性の母親認知がどのように変わるのかについて、縦断的なデータに基づいて検討した。そこでは青年期からの語りの変化に焦点を当てた。本報告では子どもを持ち母親となる経験の有無が母親認知にどう影響しているかに焦点を当てる。子どもを持っている場合とそうで

\* 文学部心理教育学科発達心理研究室

\*\* 順天堂大学医療看護学部

ない場合での母親についての語りの違いを分析する。すなわち家庭を築き母親になる（乳幼児の母親である）ということが、母親との関係、母親認知にどのような変化をもたらすのかについて検討する。また、青年期に回顧された幼児期の母親との関係（認知）と成人期の母親との関係、母親認知の関連とについても検討する。

## 方法

1. 対象者；看護女子短大3年であった1994年に自己の生育過程調査に参加した98名のうち、10年後の2004年の質問紙調査に参加し、かつ2005年の面接調査に応じるとした者20名。年齢32～33歳。現在の職業は、看護師8名、保健師2名、助産師1名、養護教諭1名、パート職3名、専業主婦5名である。また既婚者は11名で、そのうち子どもがいる者8名、第一子妊娠中の者2名である。

なお、対象者には1994年時に書いた成育史の内容を、また2005年の面接内容を、研究成果として匿名で公表することを書面および口頭にて承諾を得ている。

2. 実施時期；初回—1994年5月 今回—2005年7～9月

3. 手続き

(1)初回1994年（看護短大3年在籍時）

発達心理学の講義の後に、幼少期から今までどのように育てられたか、周りの人はどんな意味をもっていったか等についての各自の成育過程を書くレポート課題を課し、約10日後に提出してもらった。具体的にはA4の用紙を4×3の欄に分割したものに、4つの時期—乳幼児期、小学校時代、中学・高校時代、高校卒業以降—それぞれに関して3つの設問「1. どのような時期だったか、どのように育てられ、それをどう感じていたか 2. どんなことがあったか（自分にとって重要だったこと、楽しかったこと、嫌だったこと、つらかったこと等） 3. 自分にとって周りの人（母親、父親、きょうだい、友人、教師等）はどんな意

味をもっていったか、誰が自分にとって重要だったか」について自由に記述してもらった。なお、プライバシーに関することなので、「誰々が～だった」というかたちでは口外しないこと、書きたくないことは書かなくてよいことを伝えた。提出されたレポートの字数は短いもので400字×3枚、長いものは14枚、平均6枚程度のものが多かった（山岸2000、山岸・井森2008参照）。

(2)今回2005年（30代前半）

2004年の郵送法による質問紙調査の際、この10年間のことと現在のことについて面接調査をしたいという依頼を行い、承諾を得た者に、日程を調整して大学の研究室まで出向いてもらった。

面接では、幼少期から短大時代まで、そして卒業後にどのようなことがあったか、どのような時代だったか、自由に語ってもらった。さらに母親はどのような人か（形容詞でいうと、あるいは一言でいうとどんな感じか）、母親に対する気持ちは変わったか、どう変わったか、何によって変わったのだと思うか。いままでの人生で重要だったことは何か等について語ってもらった。所要時間は、11年前に本人が記述した成育史を読んだ印象や自分の変化、現在のこと等も含めて1時間程度であった。了承を得て、レコーダーに録音し、書き起こした（山岸・井森2008参照）。

4. 分析方法とカテゴリー

(1)1994年（看護短大3年在籍時）に回想した幼児期における母親の捉え方

看護短大3年在籍時に回想した、幼児期における母親に関する叙述には、対象として母親をみた語りはみられず、母親と自分の関係を述べたもののみであった（対象としての母親の語りは中学・高校時代以降の時期の叙述に出現していた（山岸・井森2008））。

〈幼児期における母親の捉え方の分類（母親との関係の分類）〉

幼児期における母親の捉え方すなわち自分と母親との関係を捉えるための「母親との関係の分類カテゴリー」は、

表1 母親との関係の分類カテゴリー

「安定した愛着関係のあり方」
A 安定した良好な関係—時期に応じた安定した愛着関係をもち、安定のベースを提供されていると感じている。 (A) 準A—Aほど明確ではないが問題や葛藤などは見られない。弱A
「愛着に関する葛藤のあるアンビバレントのあり方」
B 問題や葛藤がある関係—反発、親の統制、分離不安、しがみつきなど (B) 準B—問題があるがBほど明確でなく穏やかなもの。弱B <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">B</span> 強B—強い問題や葛藤がある
「愛着関係からの回避のあり方」
C 関係性が希薄—情緒性が少ない、母親に関する記述が不自然に少ない、他の対象に愛着をむけるなど (C) 準C—Cほど明確ではないが関係性が希薄とおもわれるもの。弱CややB混合
「評定不能」
N 評定不能—記述が少ない等により評定できない (他の記述はあるが、母親に関する記述が不自然に少ない場合はC、全体的に記述が少なく評定できない場合はN)

アタッチメントの3つの型を考慮しながら設定された山岸(2000)を基に作成した。山岸(2000)の分類は、本人がどう認知しているかに基づくものであり、無意識的なものも含め研究者が査定する成人アタッチメントとは異なっているが、「安定した愛着関係のあり方」「愛着に関する葛藤のあるアンビバレントのあり方」「愛着関係からの回避のあり方」にほぼ対応した3カテゴリと「評定不能」を加えた4カテゴリからなり、それをさらに内容(11種類)や強さを考慮したサブ・カテゴリに細分化している。本研究では内容のカテゴリは使用せず、強さのサブ・カテゴリを含めて表1のようなカテゴリを用いることとした。

(2)今回2005年(30代前半)現在の、母親の捉え方

半構造化面接の中の、母親に関する語りを取り出し、類似したものをまとめ、カテゴリを設定した。「対象として母親をみた言及」である〈対象認知〉と「母親と自分の

関係の言及」である〈関係認知〉、また、〈肯定的言及〉と〈否定的言及〉に大別することができた。

〈肯定的言及〉に関しては1994年の各時期の母親認知の肯定的記述と類似の語りがみられたので、できるだけ山岸(2000)に用いたこれまでのカテゴリ、「(「実質的支え」(今回⑥)、「精神的支え」(今回⑤)、「良い関係」(今回④)、「感謝」(今回①)、「大人としての扱い」(今回出現せず)、「先輩・モデル」(今回③)、「いたわりの気持ち」(今回出現せず))に合う形で(今回出現しなかった「大人としての扱い」と「いたわりの気持ち」を除き、これまで(山岸2000)にはなく今回出現した②「気持ち・立場の理解」を加えた)6つのカテゴリ(「先輩・モデル」は今回③「尊敬評価」,「良い関係」は今回④「親密な関係」とカテゴリ名を変更している)を設けた。〈否定的言及〉に関しては6つの肯定的カテゴリの反対方向の6カテゴリのうち出現しなかった2つを除く4つの否定的カテゴリ

表2 現在の母親の捉え方の分類カテゴリ

「対象として母親をみた言及」対象認知
<p>〈肯定的言及〉</p> <p>①感謝の気持ち(母親への感謝の気持ち。感謝の気持ちがより強くなっている)</p> <p>②行動・気持ち・立場の理解(気持ちや大変さがわかる。子どもの頃の母親のネガティブな行動の理解)</p> <p>③尊敬・評価(女性として、母親として尊敬・評価する。母のようにしたい。)</p> <p>〈否定的言及〉</p> <p>－③尊敬評価しない(母のようになりたくない。良い母ではない。)</p>
「母親と自分の関係の言及」関係認知
<p>〈肯定的言及〉</p> <p>④親密な関係(こころのつながりがある。良いコミュニケーションが取れている。」「自分の意見を言って、わたしの意見も取り入れてくれる」「相談相手は母親、人生で思い出となっていることは、すべて母親と決めた」</p> <p>⑤精神的支え(話を聞いてくれる。」「なにかあると話聞いてくれる」「困ったことがあるとすぐ母に相談」</p> <p>⑥実質的支え(なくてはならない。」「子育てをするにあたってはなくてはならない存在」</p> <p>〈否定的言及〉</p> <p>－④親密でない(好きでない。」「親のこと好きじゃない」「今でも頭にきている」</p> <p>－⑤精神的支えなし(相談しない。」「相談はしない」「話を聞いてくれない。相談する気にならない」</p> <p>－⑥実質的支えなし(親が重要という認識ない)「親が重要という認識あまりない。親に依存はしなかった。」</p>

表3 「対象として母親をみた言及」の内容

(a.どう育てられたかを見直す語りとb.現在の自分に対する母親の行動に関する語り)

〈肯定的言及〉
<p>①感謝の気持ち</p> <p>1)ここまで育ててくれたこと－a. 母親にどう育てられたかを見直すことがなされている</p> <p>2)現在の自分を心配し支えてくれること－b. 現在の自分に対しての母親の行動に基づく</p> <p>3)決定を後押ししてもらったこと－c. それ以外</p> <p>②行動・気持ち・立場の理解</p> <p>1)子どもの頃の母親のネガティブな行動(うざったいと思っていた母親からの働きかけなど)の理解－a.</p> <p>2)親の気持ちがわかるようになった－a.</p> <p>3)家の中の母親の立場－c.</p> <p>③尊敬・評価</p> <p>1)母親として－a.</p> <p>2)女性として－c.</p> <p>3)仕事に対するまじめさ－c.</p> <p>4)子育てを手伝ってくれる存在として－b.</p> <p>5)家事ができることに対して－c.</p>
〈否定的言及〉
<p>－③尊敬評価しない</p> <p>1)子育てでモデルとしての否定的評価－a.</p>

(-③, -④, -⑤, -⑥)を設けた。

これらの、現在の母親の捉え方の分類カテゴリーを表2に示した。

また、「対象として母親をみた言及」である〈対象認知〉カテゴリー①, ②, ③, -③については、さらにそれぞれの言及内容を再分類し a.母親にどう育てられたかを見直すことがなされている語り, b.現在の自分に対しての母親の行動に基づく語り, c.それ以外, に分けた。それを表3に示した。

## 結果と考察

### 1. 親になることと母親認知

#### 1) 母親群と未母親群の各カテゴリーの出現率の違い

今回の被調査者のうち子どもを持っている者は8名であり、その子どもはすべて乳幼児期にあった。この8名と第一子を妊娠中の2名を含めた10名を「母親群」とした。「母親群」はすべて既婚者であった。一方、子どもを持っていないものは「未母親群」とした。「未母親群」10名のうち1名は既婚者、9名は独身者であった。群別に、現在(成人期)の母親の捉え方の各カテゴリー(表2)に該当する語りがみられた人数を表4に示した。また、群別に「対象として母親をみた言及」対象認知の各カテゴリー(表3)に該当する語りがみられた人数を表5に示した。

「対象として母親をみた言及」対象認知に関して(表4, 表5参照)

①感謝の気持・感謝の気持の強まりの表明は、「母親群」にも「未母親群」にもほぼ同じような割合でみられた(表4)。しかし、その感謝の気持の内容をみる(表5)と、「未母親群」では2)現在の自分に対する支え、心配してくれることへ思いbが語られている。また妊娠中では3)決定を後押ししてもらったことcが語られているが、実際に

子育てしている「母親群」では1)ここまで育ててくれたことaに感謝している。

②気持ちの理解(母親の気持ちがわかるようになった・大変さがわかる・子どもの頃の母親のネガティブな行動の理解)は「母親群」の半数(5名)の人にみられたが、「未母親群」では1名にしかみられなかった(表4)。そして、内容に関して(表5)も、その1名の「未母親群」からは“父と祖母の間で苦しむ母、母は良く耐えて世話をした”という3)家の中での母親の立場(人間関係)の理解cが語られた。一方実際に子育てしている母親群4名からは“母親に似てきた。片付けなさいとせわしく言う。今になって気持ちがわかるようになって”など1)子どもの頃の母親のネガティブな行動(うざったいと思っていたこと)の理解aが、また1名からは“感謝は前からあったけど、親の気持ちになって考えられるようになった”という2)母親の気持ちの理解aが語られた。ここには母親としての経験が関係していると思われる。

③母親(女性としても含む)への尊敬や評価(大変さがわかる(すごい)・母のようにしたい)についても「母親群」の半数(5名)の人にみられたが、「未母親群」では2名にみられただけだった(表4)。内容について(表5)は、2名の「未母親群」では“女性としてお母さんの考えもいいなと思う”という2)女性としてc, また5)家事ができることcに対して語られた。一方、「母親(妊娠中含む)群」では“母は何かやってという手を止めてやってくれるような母、今思うと、わたしは今できないので良くできた母だったと思う”など1)母親としての尊敬評価aが3名からみられたが、そのほか“まじめにこつこつ働いている、当たり前前の方がすごいな”という3)仕事に対するまじめさb, また4)子育てを手伝ってくれる存在bとしての評価もあった。

また、その否定である、-③尊敬・評価しない(母のようにしたくない・母のようになりたくない・いい母親かど

表4 現在(成人期)の母親の捉え方の各カテゴリーに該当する語りがみられた人数

肯定的	母親群 (N=10)	未母親群 (N=10)	否定的	母親群 (N=10)	未母親群 (N=10)
①感謝の気持	4	3			
②気持ちの理解	5	1			
③尊敬・評価	5	2	-③尊敬・評価しない	3	0
④親密な関係	1	4	-④親密でない	1	3
⑤精神的支え	1	4	-⑤精神的支えなし	2	2
⑥実質的支え	2	3	-⑥実質的支えなし	0	2

表5 群別項目言及数  
母親群の( )は妊娠中の言及数

カテゴリ(項目)	母親群	未母親群
①感謝の気持 1)a	3	
2)b	(1)	2
3)c		1
②気持・立場の理解 1) a	4	
2 )a	1	
3)c		1
③尊敬・評価 1)a	2 (1)	
2)c		1
3)c	1	
4)b	1	
5)c		1
-③尊敬・評価(否) a	3	

うかわからない)については「母親群」3名にみられ、「未母親群」ではみられなかった。その内容(表5)は“お母さんようになってっちゃうかなと思いがらなりたくないと思う。勉強勉強とってききた、すごいいろいろ習わせてもらった。今のわたしは価値観が違う、嫌いじゃないけど、仲はいいほうだと思うが、こういうのはいやだなあというときも多々ある”など子育てモデルとしての否定的評価aであった。

③または-③の言及は「母親群」10名中8名にみられており、「母親群」において自分の母親としてのあり方(育て方)を考えると、母親にどう育てられたかを客観的に見直すことがなされていると思われる。

なお、「対象として母親をみた言及」対象認知に関して、「母親群」の延べ言及数は17、そのうちのa(母親にどう育てられたかを見直すことがなされている語り)は14、「未母親群」の延べ言及数は6、そのうちのaは0であった。母親群においては母親にどう育てられたかを見直すことがなされ、そのことがこの期の母親認知に影響を与えているといえる。

「母親と自分の関係の言及」関係認知(表4参照)

④親密な関係(仲がよい・理解がある)については逆に「未母親群」4名にみられ、「母親群」では1名にすぎなかった。また、その否定である-④親密でない(衝突が多い、親のこと好きじゃない)も「未母親群」3名にみられ、「母親群」では1名にすぎなかった。④または-④の言及は「母親群」で10名中2名であるのに対して、「未母親群」では10名中7名にみられており、「未母親群」では「母親群」より母親との関係が主要な関係であるか、母親との関係を解決していないこと(葛藤中)が多いことが窺える。

⑤精神的支え(話をきいてくれる・相談する)という表現も、④親密な関係と同様に、「未母親群」4名にみられ、「母親群」では1名にみられたにすぎなかった。その否定である-⑤精神的支えなし(相談しない)は「母親群」「未母親群」各2名にみられている。

⑥実質的支え(重要・なくてはならない)という言及は「母親群」2名、「未母親群」3名で、ほぼ同じような割合でみられた。-⑥実質的支えなし(重要でない)は「未母親群」2名のみにみられた。

なお、この2名には-④親密でないという言及もみられており、その言及はすべて否定的カテゴリーからなる語り“否定的語り”であった。なお、「母親群」にも否定的言及のみで肯定的言及が含まれていない“否定的語り”が1名あった。

## 2) 母親群と未母親群における肯定的語り・両面的語り・否定的語り

語りがすべて肯定的カテゴリーからなるものを“肯定的語り”，肯定的カテゴリーと否定的カテゴリーからなるものを“両面的語り”，すべて否定的カテゴリーからなるものを“否定的語り”として、「母親群」と「未母親群」別にその人数を見てみると，“肯定的語り”は「母親群」6名、「未母親群」5名，“両面的語り”は「母親群」3名、「未母親群」3名、そして“否定的語り”は1)の最後に述べたように「母親群」1名、「未母親群」2名であった。

肯定的語り・両面的語り・否定的語りの割合は「母親群」「未母親群」でほぼ同じであるが、その言及内容からみた母親に対する認知傾向には相違があるといえよう。

## 2. 現在(成人期)の関係と幼児期の母親認知との関連

現在の「母親と自分の関係の言及」関係認知(表3)に関して、④⑤⑥はよいコミュニケーションがとれている・信頼関係への言及、-④-⑤-⑥は信頼関係がない・コミュニケーションがとれていないことの言及である。④⑤⑥のみの言及、および-④-⑤-⑥の言及がない場合をよい関係、-④-⑤-⑥の言及がある場合をよくない関係とした。

この現在の関係と幼児期の認知との関係を「母親群」と「未母親群」別に、表6-1、表6-2に示した。

表6-1 母親群

現在\幼児期	A (A)	B	B	C (C)	N
よい関係	2 (2)	2		1	
よくない関係	(1)			1	1

表6-2 未母親群

現在\幼児期	A (A)	B	B	C (C)	N
よい関係	(4)			1	
よくない関係	(1)		1	2	1

なお、現在のよくない関係8名は、1. 2)で述べた、すべて否定的カテゴリーからなる“否定的語り”と肯定的カテゴリーと否定的カテゴリーからなる“両面的語り”の者である。また、現在のよい関係12名のうち1名は“両面的語り”(②1)と-③)で、のこり11名は語りがすべて肯定的カテゴリーからなる“肯定的語り”の者である。

## 1) 関係の安定性

母親群(表6-1)で、幼児期により関係(A (A))で、現在もよい関係の者は10名中4名にみられ、未母親群(表6-2)でも幼児期により関係で、現在もよい関係の者は10名中4名にみられた。つまり「よい→よい」は20名中8名。逆に、幼児期よくない関係(A (A)以外)で現在もよくない関係は、母親群に2名、未母親群に4名みられた。つまり「よくない→よくない」は20名中6名であった。

全体的に見ると、その関係は幼児期と現在（成人期）で20名中14名が変わっておらず、一致率70％であり、ほぼ安定しているといえる。

幼児期と現在で変化した者をみると、幼児期によい関係で、現在よくない関係になった「よい→よくない」は母親群、未母親群の各1名ずつみられた。逆に、幼児期よくない関係（A（A）以外）で現在よい関係「よくない→よい」は、母親群に3名、未母親群に1名みられており、母親群では、よくない関係からよい関係になったものが、未母親群よりやや多く、一致率は60％であった。一方、未母親群では安定性はより高く、80％が現在と幼児期が一致していた。

## 2) 幼児期と現在で関係がかわらないケース

幼児期によい関係（A（A））で、現在もよい関係「よい→よい」の両群8名のうち、幼児期A〔安定良好〕は2名であり、この2名とも母親群であった。この2名のうち1名（子ども有り）は現在、対象認知カテゴリーの①感謝の気持、②行動・気持ち・立場の理解、③尊敬・評価と全てに、もう1名（妊娠中）は①感謝の気持と③尊敬・評価に言及していた。

のこりの母親群の2名、未母親群4名は幼児期（A）〔Aほど明確ではないが問題や葛藤などは見られない準A〕であった。このうち、母親群の1名は②（その中の1）子どもの頃の母親のネガティブな行動（うざったいと思っていた母親からの働きかけなど）の理解に、もう1名は①と②（その中の1）子どもの頃の母親のネガティブな行動（うざったいと思っていた母親からの働きかけなど）の理解に言及していた。未母親群の4名は①に言及が2名、③に言及が1名、対象認知カテゴリーに関しては言及無しが1名であった。

幼児期A〔安定良好〕である場合、幼児期（A）〔Aほど明確ではないが問題や葛藤などは見られない準A〕である場合より、現在においてもより肯定的に、感謝と尊敬を持って、母親をみているといえるかもしれない。

逆に、幼児期よくない関係（A（A）以外）で現在もよくない関係「よくない→よくない」は、母親群に2名、未母親群に4名みられている。この「よくない→よくない」の6名は幼児期C〔希薄〕2名、（C）〔準C－弱CであるがややB混合〕2名、N〔評定不能〕1名、**B**〔強B－強い問題や葛藤がある〕1名であった。ただしこの6名のうち4名はすくなくとも現在、肯定的カテゴリー①～⑥のどれか一つには言及しており、母親に対して現在何らかの肯定的評価をしている。残りの2名（母親群1名、未母親群1名）は全く母親を評価していないが、母親群の1名は幼児期（C）〔準C－弱CであるがややB混合〕であった者で

あるが、人生の重要な決定事項を親に反対されたとの認識を持っている。未母親群の1名は幼児期の関係が**B**〔強い問題がある〕であった。

幼児期によくない関係であっても、成人期になり、保護する親－保護される子の関係ではなく、自立して対等な関係になると、関係そのものが変わるし、否定的な関係が続いていたとしても、自立しているためそれにまきこまれることなく、冷静に母親や自分との関係を見るようになる場合が多く、現在何らかの肯定的評価をするようになるものと思われる。ただし、幼児期に強い問題があったり、強い葛藤対立を経験した場合には成人期においても親とのよくない関係をそのまま持ち続けることになっていると思われる。

## 3) 関係が変わったケース

幼児期よくない関係（A（A）以外）で現在よい関係「よくない→よい」は幼児期B〔問題あり〕の2名（母親群）とC〔希薄〕の2名（母親群、未母親群）である。Bの2名は母親群だが、うち1名は現在、子育てにかなり困難を感じており、子育てを手伝ってくれる存在としてb評価（③4）している。もう1名は対象認知肯定的カテゴリー①②③全てに言及していた。Cだった2名のうち母親群の1名は－③母親のように子育てしないと云いつつ、②行動・気持ち・立場の理解（その中の1）子どもの頃の母親のネガティブな行動（うざったいと思っていた母親からの働きかけなど）の理解に言及していた。未母親群の1名は①2）支えてくれたこと、③5）家事ができることに言及していた。

ここでも成人期になり、保護する親－保護される子の関係ではなく、自立して対等な関係になると、関係そのものが変わるということが見られた。とくに、母親群において自分が子どもを育てることが、母親の行動を理解し、母親への感謝へとつながっていく場合のあることがみられた。

幼児期によい関係で現在はよくない関係「よい→よくない」は母親群1名、未母親群1名の2名だったが、その2名とも幼児期は（A）〔Aほど明確ではないが問題や葛藤などは見られない準A〕であった。そのうち母親群の1名は、現在よいとはいえない関係とはいえ母親の仕事に対するまじめさ（③3）は評価している。もう1名（未母親群）は、現在の言及は－④と－⑥であり、感謝、理解、評価は全く見られなかった。大学入学以降に家族全体を巻き込む大きな環境変化を体験し、親を親としてみるができなくなっていた。

## 4. まとめ

1) 30代になり、ケアする立場はとっていても、対

象としての母親認知においては、その言及内容に母親になっている場合となっていない場合で違いがみられた。乳幼児をもつ母親になっている場合には母親にどう育てられたかを見直すことがなされている語りが多く見られた。一方、母親になっていない場合ではどう育てられたかを見直すことがなされている言及はみられず、現在の自分に対しての母親の行動に基づく語りなどがみられた。

2) ケアする立場になったこの期において、母親との関係は母親になっているか否かに関わらず、(青年期に回顧した) 幼児期の関係と関連があることが示唆された。ただ、幼児期に母親との関係がよくなかった者で成人期によくなったものも2割みられた。母親になっている場合に、なっていない場合より多くみられた。これは母親になり、母親にどう育てられたかを見直すことが多くなることと関連しているのかもしれない。また、この期では、よいといえない関係においても、特別の問題がある場合をのぞけば、何らかの肯定的評価がなされるようになることがみられた。

井森他(2006)の横断研究においても、親との安定したパートナーシップ形成は20代から30代にかけて増加することが見出されており、今回の結果はそれと一致しているといえよう。

## 付記

本研究の一部は日本発達心理学会第18回大会(井森澄江・山岸明子「成人期女性の母親認知(2)」)、及び日本パーソナリティ心理学会第14回大会(井森澄江・山岸明子「母親認知の縦断的变化(2)」)で発表した。また18・19年度順天堂大学医療看護学部学内共同研究費の補助を受けた。

## 文献

- 1)岡本祐子：女性の生涯発達とアイデンティティ，北大路書房：京都，1999.
- 2)柏木恵子：家族心理学－社会変動・発達・ジェンダーの視点，東京大学出版会，2003.
- 3)Fischer, L.R. : Transitions in the mother-daughter relationship. *Journal of Marriage and the Family*, 43, 613-622, 1981.
- 4)春日井典子：ライフコースと親子関係，行路社，1997.
- 5)島谷いずみ：日本の成人期の母娘関係，東京大学大学院修士論文，1999.
- 6)北村琴美・無藤隆：成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して，発達心理学研究，12-1, 46-57, 2001.
- 7)北村琴美・無藤隆：成人の娘とその母親における相互間サポート，日本発達心理学会13回大会論文集231, 2002.
- 8)van IJzendoorn, M.H. : Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment : A meta-analysis on the predictive validity of the adult attachment interview. *Psychological Bulletin*, 117, 387-403, 1995.
- 9)数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹：日本人母子における愛着の世代間伝達，教育心理学研究，48-3, 323-332, 2000.
- 10)渡邊恵子：青年期から成人期にわたる父母との心理的関係，母子研究，18, 23-31, 1997.
- 11)井森澄江・井上俊哉・大井京子・西村純一・斉藤こずゑ：親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅰ～Ⅳ，東京家政大学研究紀要，46, 237-270, 2006.
- 12)Grossman, K.E., Grossman, K., & Waters, E.: Attachment from infancy to adulthood: Major longitudinal studies. The Guilford Press :New York, 2006
- 13)Sroufe, L.A., Egeland, B., Carlson, E.A., & Collins, W.A.: The development of the person: The Minnesota study of risk and adaptation from birth to adulthood. The Guilford Press: New York, 2005.
- 14)山岸明子・井森澄江：母親認知の縦断的变化－青年期から成人期にかけて－，順天堂大学医療看護学部 医療看護研究，4, 20-28, 2008.
- 15)山岸明子：女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係，青年心理学研究，12, 31-46, 2000.
- 16)山岸明子：対人的枠組と過去から現在の経験のとらえ方に関する縦断的研究，風間書房，2006.

### Abstract

The purpose of this study was to examine through longitudinal data how one's cognition of one's mother changes from adolescence to adulthood and by becoming a mother. The subjects were twenty female graduates of a nursing junior college now in their thirties who had written their life histories as a report assignment in college. After 11 years, the subjects, ten of whom had become mothers, while the remaining ten had not become mothers yet, participated in interviews in which they were asked questions about their mothers, such as what kind of person their mothers were, or whether their feelings towards their mothers had undergone any changes.

Comparison were made between the description of their mothers that they wrote from early childhood to period of junior college in 1994 and what they told in the interview in 2005 from the viewpoint of becoming a mother. The subjects are divided into two groups of mothers and other than mothers. Differences were found in what were told in the interview between the two groups. In the case of the mother taking care of an infant, many talks were found referring to that she reviewed how she was brought up by her mother. At the period of taking care of a parent, it was suggested that the relationship to a mother was concerned with the relationship to a mother in infancy that was recollected in adolescence, regardless of becoming a mother. It was found that except that particular problems were involved, affirmative estimation came to be made to some extent in adulthood even in the case of such relationship that was far from good.